

## 【D年】受難節第3主日(2024年3月3日)

## 【旧約聖書日課】ヨシュア記 24章14~24節

<sup>14</sup>あなたたちはだから、主を恐れ、真心を込め、真実をもって彼に仕え、あなたたちの先祖が川の向こう側やエジプトで仕えていた神々を除き去って、主に仕えなさい。<sup>15</sup>もし主に仕えたくないというならば、川の向こう側にいたあなたたちの先祖が仕えていた神々でも、あるいは今、あなたたちが住んでいる土地のアモリ人の神々でも、仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」<sup>16</sup>民は答えた。「主を捨てて、ほかの神々に仕えることなど、するはずがありません。<sup>17</sup>わたしたちの神、主は、わたしたちとわたしたちの先祖を、奴隷にされていたエジプトの国から導き上り、わたしたちの目の前で数々の大きな奇跡を行い、わたしたちの行く先々で、またわたしたちが通って来たすべての民の中で、わたしたちを守ってくださった方です。<sup>18</sup>主はまた、この土地に住んでいたアモリ人をはじめ、すべての民をわたしたちのために追い払ってくださいました。わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です。」<sup>19</sup>ヨシュアはしかし、民に言った。「あなたたちは主に仕えることができないう。この方は聖なる神であり、熱情の神であって、あなたたちの背きと罪をお赦しにならないからである。<sup>20</sup>もし、あなたたちが主を捨てて外国の神々に仕えるなら、あなたたちを幸せにした後でも、一転して災いをくだし、あなたたちを滅ぼし尽くされる。」<sup>21</sup>民がヨシュアに、「いいえ、わたしたちは主に礼拝します」と言うと、<sup>22</sup>ヨシュアは民に言った。「あなたたちが主を選び、主に仕えるということの証人はあなたたち自身である。」彼らが、「そのとおり、わたしたちが証人です」と答えると、<sup>23</sup>「それではあなたたちのもとにある外国の神々を取り除き、イスラエルの神、主に心を傾けなさい」と勧めた。<sup>24</sup>民はヨシュアに答えた。「わたしたちの神、主にわたしたちは仕え、その声に聞き従います。」

## 【使徒書日課】

## ガラテヤの信徒への手紙 2章11~21節

<sup>11</sup>さて、ケファがアンティオキアに来たとき、非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって反対しました。<sup>12</sup>なぜなら、ケファは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしたからです。<sup>13</sup>そして、ほかのユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。<sup>14</sup>しかし、わたしは、彼らが福音の真理にのっとなってまっすぐ歩いていないのを見たとき、皆の前でケファに向かってこう言いました。「あなたはユダヤ人でありながら、ユダヤ人らしい生き方をしないで、異邦人のように生活しているのに、どうして異邦人にユ

ダヤ人のように生活することを強要するのですか。』

<sup>15</sup>わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。<sup>16</sup>けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。<sup>17</sup>もしわたしたちが、キリストによって義とされるように努めながら、自分自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者ということになるのでしょうか。決してそうではない。<sup>18</sup>もし自分で打ち壊したものを再び建てるのであれば、わたしは自分が違犯者であると証明することになります。<sup>19</sup>わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。<sup>20</sup>生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。<sup>21</sup>わたしは、神の恵みを無にしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章60~71節

<sup>60</sup>ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」<sup>61</sup>イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているの気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。<sup>62</sup>それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば、.....<sup>63</sup>命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。<sup>64</sup>しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。<sup>65</sup>そして、言われた。「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。」<sup>66</sup>このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。<sup>67</sup>そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。<sup>68</sup>シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きますか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。<sup>69</sup>あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」<sup>70</sup>すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」<sup>71</sup>イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ヨシュア記24章14～24節

14今こそ、あなたがたは主を畏れ、真心と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖が、ユーフラテス川の向こうやエジプトで仕えていた神々を除き除き、主に仕えなさい。15もし、主に仕えることがあなたがたの気に入らないのなら、ユーフラテス川の向こうにいた先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを今日、選ぶがよい。しかし、私と私の家は主に仕える。」

16民はこう答えた。「主を捨てて、他の神々に仕えることなど、私たちがするはずがありません。17私たちの神、主こそ、私たちと私たちの先祖を、エジプトの地、奴隷の家から導き上げてくださった方であり、私たちの目の前でこれら数々の大いなるしるしを行い、私たちの歩んだすべての道で、また私たちが通って来たすべての民の中で、私たちを守ってくださった方です。18主は、この地に住んでいたアモリ人をはじめ、すべての民を追い出してくださいました。私たちがまた主に仕えます。この方こそ私たちの神だからです。」

19ヨシュアは民に言った。「あなたがたは主に仕えることができないであろう。この方は聖なる神であり、妬む神であって、あなたがたの背きと罪をお赦しにならないからである。20あなたがたが主を捨てて異国の神々に仕えるとき、主はあなたがたに幸いを与えた後でも一転して災いを下し、あなたがたを滅ぼし尽くされる。」21民はヨシュアに言った。「いいえ、私たちは主に仕えます。」22ヨシュアは民に向かって、「あなたがたが主を選び、主に仕えるということの証人は、あなたがた自身である」と言うと、民は「私たちが証人です」と答えた。23「ならば今、あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、あなたがたの心をイスラエルの神、主に向けなさい。」24民はヨシュアに向かって、「私たちは私たちの神、主に仕え、その声に聞き従います」と言った。

## ガラテヤの信徒への手紙2章11～21節

11ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、責めるべきところがあったので、私は面と向かって非難しました。12というのも、ケファは、ヤコブから遣わされた人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼を受けている者たちを恐れ、異邦人から次第に身を引き、離れて行ったからです。13そして、ほかのユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。14彼らが福音の真理に従ってまっすぐ歩いていないのを見て、私は皆の前でケファに言いました。「あなたは自分がユダヤ人でありながら、ユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活してい

るのに、どうして異邦人にユダヤ人のようになることを強いるのですか。」

15私たちは生まれながらのユダヤ人であり、異邦人のような罪人ではありません。16しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義とさせていただくためです。なぜなら、律法の行いによっては、誰一人として義とされないからです。17それでは、キリストにあって義とされることを求めながら、私たち自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者となるのでしょうか。決してそうではない。18もし自分で打ち壊したものを再び建てるとすれば、私は自分が違犯者であると証明することになります。19私は神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストと共に十字架につけられました。20生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を献げられた神の子の真実によるものです。21私は神の恵みを無駄にはしません。なぜなら、もし義が律法を通して得られるならば、キリストの死は無駄になってしまうからです。

## ヨハネによる福音書6章60～71節

60弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「これはひどい話だ。誰が、こんなことを聞いていられようか。」61イエスは、弟子たちがこうつぶやいているのに気付いて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。62それでは、人の子が元いた所に上るのを見たら、どうなるのか。63命を与えるのは霊である。肉は何の役にも立たない。私があなたがたに話した言葉は霊であり、命である。64しかし、あなたがたの中には信じない者がいる。」イエスは最初から、信じない者がだれであるか、また、ご自分を裏切る者が誰であるかを知っておられたのである。65そして、言われた。「こういうわけで、私はあなたがたに、『父が与えてくださった者でなければ、誰も私のもとに来ることはできない』と言ったのだ。」

66このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。67そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも去ろうとするのか」と言われた。68シモン・ペトロが答えた。「主よ、私たちは誰のところへ行きましょう。永遠の命の言葉を持っておられるのはあなたです。69あなたこそ神の聖者であると、私たちは信じ、また知っています。」70すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人は、私が選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」71イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・3月3日「受難節第3主日」の日課主題は「受難の予告」。

・旧約聖書日課は、「ヨシュア記」から、ヨシュアがイスラエルのカナン定住を完了した後にシケムでの再契約に臨んだ場面の中の箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、異邦人との食事に際してのケファらの振る舞いを批判する箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「パンの出来事」に続く教えを終えた後の弟子たちの反応を伝える箇所。

**旧約日課(ヨシュア 24章より)**

・「ヨシュア記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第一に置かれた歴史物語文書。「前の預言者」は、「ヨシュア記」から「列王記」までの四巻に渡ってイスラエルのカナン地方定住時代を描く「イスラエル正史物語」として構成されている。その中で「ヨシュア記」は、モーセの後継者としてイスラエルの民をカナンの地に導き入れたヨシュアの死までを扱う。

・「ヨシュア」は、「出エジプト記」から「申命記」までの「モーセ物語」の中で、早くからモーセの従者として登場させられている。最初の登場は、エジプトを出たモーセとイスラエルの民がシナイ山に至る前、レフィディムの地でアマレクとの戦いに臨んだ場面で、ヨシュアは事実上の軍司令官として描かれている。また、シナイ山からカナン地方を目指して移動して一年後、カデシュの地から真つすぐ北上してカナン地方に入るように主に命じられた際、モーセが先遣の偵察隊として送った12人の中の一人、その偵察隊の中でカナン侵入に積極的な報告をした二人の内の一人でもある(民数記13章)。その際、積極的な報告をしたもう一人はユダ族出身のカレブで、「ヨシュア記」は、この人物とヨシュアが第一世代の生き残りとして第二世代をカナン地方に導き入れたとしている(1章)。ヨシュアは、エフライム族の「ヌンの子」と呼ばれており、後代の北王国イスラエルの中心部族であるエフライム族で伝承されてきた父祖的存在の一人であったと考えられる。一方、「ヨシュア記」は、ヨシュアがモーセから継承した「神の箱」をカナン定住後にシロの地に設けた「臨在の幕屋」に安置したことを伝えているが、この「シロの臨在の幕屋」は「サムエル記」で「シロの神殿」として継承されており、そこに安置されていた「神の箱」は、ペリシテ人に一時的に奪われた後、最終的にはダビデの手に渡り、彼が「ユダとイスラエルの王」としてエルサレムに都を定めた際に、エルサレムの丘に建てた「幕屋」に安置、最終的にはソロモン王の建てた「エルサレム神殿」に安置されて引き継がれたとされている。つまり、「ヨシュア伝承」は、元来はエフライム族に固有のものであったと考えられるが、ユダ族は、そのヨシュアを自分たちの宗教伝承に欠かせない存在として扱うようになったのである。

・日課箇所は、「ヨシュア記」の最終章に置かれた「シケムの契約」と呼ばれる場面の一部。「シケム」は、ゲリジム山とエバル山に挟まれた峡谷地に位置する。この地は、カナン入植の初期にヨシュアがイスラエルの人々を集めて「律法」を朗読して聞かせた場所として描かれており(8:30~35)、また、カナンの地の割り当てにおいてはエフライム族領とマナセ族領の境界域に位置し、「逃れの町」として治外法権の認められた地とされている(20章)。さらに、王国時代の物語の中では、ソロモン王没後に「ユダ・ダビデ王国」から分離した「イスラエル」の諸部族がヤロブアムを王として即位させた地として伝えられており(列王記上12章)、「北王国イスラエル」の王権を権威づける主要な聖地(聖所)として位置づけられている。遡って古くは、「創世記」に伝えられる「ヤコブ伝承」に「シケムの逸話」があり(創世記33~34章)、ヤコブ伝承と結びついた聖所が設けられていたと考えられる。

・ヨシュアの発言の中で出てくる「アモリ人」(15節)は、「創世記」のアブラハム物語にも登場する古くからの先住民で、王国時代の物語に至るまで繰り返し登場し、イスラエルと時に対立しながらも共存関係にあったとされている。考古学における「アムル人」と同一視されている。アムル人は、元来シリアの山岳地帯に居住していたセム系遊牧民で、そこからメソポタミア下流域に断続的に流入し、その中からシュメール系「ウル第三王朝」の継承者を自認する王権を握りアッシリアやバビロニアの支配者を輩出したほか、前15~13世紀ごろにはシリアの山岳地帯に遊牧民を主体とした王国を成立させていた。前12世紀以降のイスラエルがカナンに定住していた時代には、歴史上表立った動きを見せていない。しかし、イスラエルにとっては、古来無視できない人々として認識されていたのだろう。

**使徒書日課(ガラテヤ2章)**

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第四に置かれた書簡文書。パウロがバルナバ宣教団に加わって教会形成に携わったガラテヤ地方の諸教会に宛てて記されている。パウロは、バルナバ宣教団の最初の伝道旅行に同行した後、バルナバの元を離れて独自の宣教団を組織し、マケドニア伝道に赴いている(使徒16章)。それは、バルナバを始めとする使徒らの宣教方針や福音理解に対して異論を持ち、パウロ自身の福音理解を徹底した宣教活動を目指したためと考えられる。その独自色の強い福音理解が、本書簡の主張の基調を成している。ここで展開されている福音理解によれば、主イエス・キリストによってもたらされたのは、外形的に「ユダヤ人らしさ」を基礎づける生活規範としての「律法」、殊に「割礼」によって枠づけられる「ユダヤ人共同体」が、そのまま「救いの共同体=神の民」と位置づけられるわけではなく、「ユダヤ人共同体」の枠組みとは無関係に神の恵みの選びによって「救いの共同体」に入れられる道である。

・本書簡中でパウロが主張する福音理解は「ユダヤ人共同体」の枠組みを完全に否定するわけではないが、それを救いの必要条件とする主張に対してパウロは徹底的に反論し、糾弾している。その中で言及される「律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義とさせていただく」(16 節)という言説は、しばしば「律法主義批判」の典拠とされ、同時に「行為義認」を否定する論拠とされてきた。この解釈には、注意が必要である。第一に、パウロがここで「律法の実行」として想定していることは、文脈からして、「律法」で示されている倫理規範一般の事ではなく、「ユダヤ人らしい生き方」や「ユダヤ人のように生活すること」(14 節)を基礎づける社会規範のことであるから、「神の言葉」と位置づけられる「律法」の書としての聖書自体が否定されているわけではない。第二に、「律法の実行」は、ユダヤ人として生まれた者が努力して実行していたような内容ではなく、パウロ自身それを完全に遵守していたと主張できるようなものであり、人間が自分の意志で努力して実行する善なる「行為」一般を指しているわけではなく、その点で「行為義認」の議論とは異なる。

・16 節「イエス・キリストへの信仰によって(ディア・ピステオース・イエスー・クリストウ)」を、聖書協会共同訳は「イエス・キリストの真実によって」と訳している。「ピステイス」は、通例「信仰」と訳されてきたが、その原義に基づいて「信頼／誠実／まこと」などとも訳されてきたが、「真実」という訳語は一般的ではない。この箇所(表現)の解釈は 20 世紀後半の聖書学でも繰り返し問題提起されてきており、広く検討の価値のある訳として提起されているのは「イエス・キリストの信仰によって」という訳である。この場合の「キリストの信仰」は、必ずしも主イエスの神に対する「信仰」のみならず、より広く他者関係における主イエスの「信頼／誠実」な態度を示唆するものとしても検討されてきた。「真実」という訳では、このような解釈の議論が不明であろう。

### 福音書日課(ヨハネ 6 章より)

・日課箇所は、「パンの出来事」に続いて主イエスが人々に教えを語られた後、弟子たちがどのような反応を示したかを伝え描く箇所。主イエスの教えは、後半で、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は…」(6:54)などの言及を繰り返しており、文字通りには「神人供食を伴う人身供養」を意味しているように受け取られかねない言説となっている。ユダヤ教では「人身供養」を禁じており(レビ 18:21、申 12:31 など)、より一般的には「血」を飲むことを厳禁としている(レビ 17:10 以下、申 12:13 以下など)。

・主イエスのパンの教えは、モーセの「マナの出来事」になぞらえて「わたしが命のパンである」(6:34)と規定するところから、「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことであり」(6:51)と展開し、上述の言及に至っている。この一連の言説における「肉」は、地上に降られた「人」としての主イエスを意味して

いると考えられるが、日課箇所では、「肉は何の役にも立たない」(63 節)と言われており、「肉(サルクス)」の解釈を難しくしている。この「肉」と対置して取り上げられる「霊(プネウマ)」は、「ヨハネ福音書」ではここまでに「洗礼」、「神の言葉」、「礼拝」などと関連する記述の中で出てきている(1:32~33、3:5~8、3:34、4:23~24)。また、この後では、イエスが授与を弟子たちに約束されたものとして取り上げられる(7:39、14~16 章など)。このような用法からは、「ヨハネ福音書」がある種の「霊肉二元論」を適用しているようにも解釈されうる。おそらく、「ヨハネ福音書」著者は「霊肉二元論」的な言説に特段の問題を感じておらず、「肉」よりも「霊」と結びつく「永遠の命の言葉」の保持者としてのイエス・キリストに焦点を合わせようとしている。

### 来週の誕生日 (3 月 3 日~9 日)

。

### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-128 番「悪は罪人の」(= II 110)は、16 世紀スイス・ジュネーブの教会改革を指導した J.カルヴァンがフランス語の詩編歌 36 編として作詞。曲は、1525 年発行のストラズブル聖歌集所収のドイツ語詩編歌 36 編のためにマテウス・グライターが作曲。同じ曲が 294 番でも用いられているが、『讃美歌 21』では異なる記譜で用いられてきたとおりに採用。
- ・21-280 番「馬槽のなかに」(= I 121)は、20 世紀日本を代表する讃美歌学者であった牧師・由木康の代表作。初期に、「イエスの神性はその人性のうちに包まれ、それを通して輝いている」との神学的確信を得たことに基づいて著した詩を、1931 年版『讃美歌』で歌詞として採用。曲は、由木と同時代に東北学院、明治学院等で教鞭を執った教会音楽家・安部正義の作。
- ・21-74 番「キリストの示す神を」は、チロル地方出身の現代カトリック宗教詩人トゥールマイルが新しく創作したエキュメニカル讃美歌。17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家クリューガーの曲につけられている。

### 21-74「キリストの示す神」

#### Dank sei dir, Vater

1. Dank sei dir, Vater, für das ewge Leben / Und für den Glauben, den du uns gegeben, / Daß wir in Jesus Christus dich erkennen / Und Vater nennen.
2. Jedes Geschöpf lebt von der Frucht der Erde; / Doch daß des Menschen Herz gesättigt werde, / Hast du vom Himmel Speise uns gegeben / Zum ewgen Leben.
3. Wir, die wir alle essen von dem Mahle / Und die wir trinken aus der heiligen Schale, / Sind Christi Leib, sind seines Leibes Glieder, / Schwestern und Brüder.
4. Aus vielen Körnern ist ein Brot geworden: / So führ auch uns, o Herr, aus allen Orten / Zu einer Kirche durch dein Wort zusammen / In Jesu Namen.
5. In einem Glauben laß uns dich erkennen, / In einer Liebe dich den Vater nennen, / Eins laß uns sein wie Beeren einer Traube, / Daß die Welt glaube.
6. Gedenke, Herr, die Kirche zu erlösen, / Sie zu befreien aus der Macht des Bösen, / Als Zeugen deiner Liebe uns zu senden / Und zu vollenden.